

事業の背景・目的

沖縄島北部に固有のヤンバルクイナは、移入種マングースの分布域北上に伴い、分布域や個体数が減少し、絶滅が危ぶまれた。保護増殖事業計画の策定により、野生復帰個体の創出や野生復帰技術開発が行われてきた。これまでに、放鳥個体の野生個体との番形成や自然下での繁殖成功例を複数得てきた。しかし、野生復帰個体の生存期間が短いこと、野生個体との比較が不足していることなどから、野生復帰により適した個体創出や放鳥・追跡技術のさらなる開発が必要である。またヤンバルクイナに好適な環境条件を抽出し、それに即した環境改善や創出が求められている。さらに、観光客の増加による生息への軋轢も懸念され、影響の軽減が重要な課題である。

事業の内容

好適な生息環境の把握と改善

- ・ヤンバルクイナに好適な生息・餌環境などを把握し、生息環境改善に役立てる
- ・観光客が生息地を訪れることによる、本種との軋轢を軽減するため、巡視や啓発等を実施する

野生個体と野生復帰個体の比較

- ・放鳥する環境に生息する野生個体の生息状況を把握
- ・野生個体を捕獲追跡し、生存期間、死因、行動範囲等の情報を得る
- ・生存率、番形成、繁殖等に影響する要因を抽出し、野生復帰個体とこれらを比較検討する
- ・より適した野生復帰個体の創出に役立てる

野生復帰
個体の放鳥



得られた成果

国頭村奥間の森林公園周辺において、巡視と観光客への啓発・指導を実施し、ノネコの目視などをやんばる野生生物保護センターに通報した。

今年度新たに野生の3個体を捕獲し、9月に野生復帰された8個体とともに追跡調査をおこない、生存率や行動圏等の情報を取得した。また、前年以前から追跡中の16個体中11個体で繁殖開始が見られ、うち3巣でヒナの巣立ち成功を確認した。

野生復帰個体は放鳥後、野生個体より移動が認められる。さらに2017年春まで放鳥していた安田地域に比べ、それ以降の奥間森林公園に放鳥した個体は、比較的遠方にまで移動して定着する傾向が見られている。これは奥間でのヤンバルクイナの密度が高いことが影響している可能性がある。

今後は世界自然遺産関連での観光客の増加も予想され、巡視や啓発の重要性が増加するものと思われる。

奥間で放鳥した野生復帰
個体の長距離移動例

